

# 淑子、澄子、嵐子、そして満洲

## 『タンゴタンゴタンゴ』を上梓して思い出す日々

大類善啓（会員）

### 未だ知られざる方正日本人公墓

「方正」については少しばかり本誌に書いたことはあるが、お読みでない方もいるだろうと思い、改めて簡単に記しておこう。

方正とはハルピン市から東へ一八〇kmのところの位置し、黒竜江省にある。旧満洲にいた「開拓民」たちは同じ黒竜江省にある宝清（ほうせい）県と区別するために、ここを「ほうまさ」と呼んだ。

一九四五年八月九日のソ連参戦、そ

れに続く日本の敗戦で、たちまち日本人たちと中国人たちの立場は逆転した。中国の農民たちは、土地を奪われた怒りから「開拓民」たちを襲撃した。

「開拓民」たちはソ連軍と中国人たちの攻撃に逃げまどい、人々は「方正には関東軍がいる。食糧の補給基地がある」と方正を目指した。逃げるために団の幹部から、泣き叫ぶ子どもは殺せと言われ、自分の子どもを扼殺することもあり、時に集団自殺した「開拓団」もあったがなんとか方正に辿り着いた。しかし、すでに関東軍は南方に移った後だった。

日本政府から棄民された人々は酷寒の方正の地で、飢餓と発疹チフス、凍死などで五千人近い人々が亡くなった。その日本人たちの公墓が周恩来総理の認可の下に、一九六三年建立された。

私が二〇〇五年、仲間たちと「方正友好交流の会」（以下、「方正の会」）を立ち上げて責任者を引き受けたのは、未だに知る人々が少ない日本人公墓の存在を多くの日本人に知ってもらい、当時の周恩来総理らの国際主義的な精神を少しでも広めたいという思いからだった。しかし今や、国際主義という言葉は、『人民日報』などの中国メデイ

アから消えて久しい。

## 公墓の存在に驚いた山口淑子

さて、「方正の会」創立総会の取材に來た読売新聞記者がすぐに、夕刊の社会面に大きく公墓に関する記事を書いてくれた。すると、その夕刊の記事を見た山口と名乗る女性から電話が入った。その日の夕方五時ごろだったか、私がまだその記事を見る前だった。女性はまだその記事を見る前だった。女性はまだ自宅に届いた夕刊の記事を読んですぐ、連絡先として記してあった私に電話をかけてきた。彼女は、「満洲で生まれ育った私も日本人公墓のことは知りませんでした」と言った。声の主は山口淑子（以下、登場するすべての人たちの敬称は略しました）だった。

彼女が「私に何かできることはないでしょうか」と言う。心臓も強くなっただけなら（笑）、「創立したばかりで会には金がないので、百万円ほど寄付してくれないか」と言ったかもしれないが、奥ゆかしくも（笑）私は、近々会報の創刊号を送るので見てほしいと言った。会報には郵便振替口座番号は記してある。しかし会報を送っても彼女からは、梨のつぶてだった。

その後、何回か彼女に電話をしたが、いつも「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」と同じ言葉を繰り返すばかりだった。たまたま、ある会合で彼女に出会い名刺を交換したが、とりわけ彼女は方正について話すわけでもなく、言葉も交わさずにただ無言で足早に立ち去った。正直に言えば、「なんだ、山口淑子という女は?!」という思いだった。

満鉄勤務の父を持つ編集者の知人は山口淑子について書いた時、彼女に確認のために原稿を見せると、「ここはどういう意味合いで貴方は書いたのか」などと、彼を厳しく叱責するかのよう

な言葉を淑子から浴びせられたことを私に話し、その時の山口への怒りが未だに収まらないかのように、「彼女は気まぐれなんですよ」と吐き捨てるかのように山口を一蹴した。

そんなこともあり、満映に中国人女優として生きた彼女のその「反省」も疑ったが、矢吹晋や当時の満洲にいた信頼できる人たちからは、「結果的に中国侵略に加担してしまったが、淑子の反省は本物である」と聞いた。しかし、彼女に対する私の印象は、ささやかな私の体験からいえば今でも良くはない。

ついでに記せば、一九七一年だったか、かつて「満洲国」の高級官吏をしていた武藤富男に取材で会った時、『満洲国の断面——甘粕正彦の生涯』という当時すでに絶版になっていた著書を贈呈してくれた彼は淑子を、ここでは憚れるような言葉で淑子の「実像」を語り、彼女を批判した。一般の人々が受け止めるような淑子ではない。まるで正反対の淑子像だった。

当初、山口という姓だけを名乗っていたので、どういう人なのかわからず、その様子を感じた彼女は「李香蘭ってご存じ？」と聞いた。知るも知らないも、藤原作弥との共著『李香蘭 私の半生』も読んでいたからもちろん知っている。

## 評価分かれる淑子像

しかし淑子を否定的に言わず、私が親しくしている長谷川捷一、悠紀子夫妻のように淑子を評価する人もいる。捷一はアラビア石油に勤務していた一九九〇年八月、イラクのフセイン政権によって多くの日本人や欧米人とともに虜囚の身になった。

当時のイギリス首相・サッチャーの「女・子どもまで人質にするとは何事か!」という批判に、フセインはいち早く女性と子どもたちを解放した。悠紀子は残る夫たちを釈放すべく、仲間の夫人たちともに会を組織し国会議員たちに働きかけた。

悠紀子は議員会館に向き、次々にアポイントを取って国会議員に会った。革新系議員は頼りにならなかつたが、淑子に電話をすると「すぐいらしてください」と言われ、親身になってくれた。

フセイン政権は、クウェート人と結婚していた日本女性と子どもたちは「日本へ帰れ」という。しかし二十人ほどいた残留婦人は危険な状態でなか

なか帰れないという。カナダ大使館はBOACを飛ばそうと言ってくれたが

一方、イギリスの日本大使館は「帰国費用は貸すから帰国するまでに返してくれ」と思いやりのないことを言う。

最終的にJALとANAに分乗して日本に帰ってきたが、彼女たちに二百万円ほどの飛行機代の請求がきた。その中の一人がどうしたものかと、悠紀子に電話をしてきた。悠紀子はすぐに淑子に電話をして会った。淑子は悠紀子に言った。「お金はお支払いにならないで。私が必要とおっしゃらないでね」私がやったとはおっしゃらないでね」と言うのだった。ともあれ、払わずにすんだのである。

悠紀子は、捷一たちを解放するに当たって活躍したアントニオ猪木と淑子の二人が、今でも頼もしい人間として印象に残っている。一九二〇年生まれの淑子は当時、七十歳ごろである。私が淑子とほんの少しばかり関わりを持った時は、八五歳ごろである。亡くなる九年ほど前であるが、すでに呆けているのであろうか。

## 方正の記録映画を創った羽田澄子

「方正の会」は創立以来、今でも年二回、会報『星火方正』を発行している。近年、それなりに評価され、昨年一二月に発行した会報は一五〇頁ほどになる厚さである。

数年前に会報を『週刊金曜日』に送ったところ、当時の編集長・小林和子（二〇二一年一月に編集長を勇退）から、「この充実した会報が会費とカンパでできているなんて驚きです」という手書きで書かれた書簡をいただき、嬉しくなった。本会の会員諸氏の中にも支援していただいている方もあり、改めてこの場を借りて感謝の言葉を述べたい。ありがとうございます。

さて、映画作家に羽田澄子という女性がいる。主に記録映画を創っていた彼女に、創刊号から『星火方正』を送っていたが、彼女にはいろいろなお知らせから本や資料が送られていたのだろう。私が送った会報を読むこともなく机の前に置いたままだったが、ある日、封

を切って驚いた。

大連生まれ、その後も大連や旅順で育った彼女も初めて、方正日本人公墓の存在を知ったのである。公墓のことを知った彼女はすぐに電話をかけてきた。「驚きました。どうして被害を受けた国が加害者たちの墓を建てたのか。一度、方正を訪ねたい」と言うのだ。

二〇〇八年、私たちの仲間が方正への墓参のツアーを企画していることを話すと、彼女はカメラマンを同行して方正を訪れた。それは二〇〇八年『嗚呼 満蒙開拓団』という映画に結実し、二〇〇八年キネマ旬報と日本映画ペンクラブの文化映画ベスト一位に輝いている。そして、二〇〇九年六月中旬から二か月半、岩波ホールで上映されて評判を呼び、その後、各地の市民運動の担い手たちによって全国的に上映された。

映画『嗚呼 満蒙開拓団』の冒頭、満洲の大地を方正へ行く映像のバックには、「私は、『星火方正』という不思議な雑誌で初めて日本人公墓を知りました」と澄子自身が語るナレーション

が入り、画面には『星火方正』の創刊号と二号の表紙写真が映し出されていた。エンドロールの〈協力〉の文字の後は、方正友好交流会の会、そして私の名前も流れた。映画のラストシーンで自分の名前が出たのは後にも先にも初めてのことだった。

### 楽しかった大連、旅順の日々

二〇〇九年のその年、『星火方正』に掲載すべく澄子にインタビューしたが、当時でも彼女は大連、そしてとりわけ旅順を懐かしんだ。彼女は、旅順港から徐々に高くなる斜面の坂の上にある赤煉瓦の二階建てに住んでいた。それは、当時の日本の庶民の家の外貌ではない。

街はアカシアの緑に埋もれて見え、波打つような緑の中に、石造りや赤煉瓦や、白やクリーム色の壁のロシア風の建物が点在している。「こんな美しい街に住んでいるのだ」と、澄子は息をのむ思いで、つくづく街を眺めたという。そしてその瞬間、「この風景を

一生忘れないだろうな」と澄子は思ったのである。

「全体に旅順はこせこせしていないんですよね。街自体も日本のように木造建築ではなくて帝政ロシア時代の建物ですから、道は車道と歩道できていて、並木があり、まったく雰囲気違って、のんびりしていて……」と当時の楽しい日々を語るのだった。

「開拓民」たちは日本の敗戦と同時に地獄のような境遇に突き落とされたが、澄子は違った。日本が敗戦になった時、彼女は「これで戦争は終わった、死ぬことはないのだ」と思い、喜んだ。彼女は、かつてニューヨークに住んでいた叔母からもらったピンクの花模様のワンピースと紺のスエードのサンダルを取りだして家を飛び出すと、近くの公園の大きな池のほとりでワンピースの裾をひるがえして街を一回りした。戦争中は、やはりスカートははけなかったのだ。当時、澄子は十九歳だった。日本の敗戦を聞いて、大連実業高校の校長をしていた澄子の父親は「俺は日本に帰る」と言い、すぐに帰国した。

澄子と妹、そして母親ら女たちは、そんな父親を見送り、旅順に残った。しかし翌年、母親と妹は日本に帰国した。「私は残るわ」と澄子は旅順に残った。彼女はそれほど旅順を気に入っていたのだ。しかし、だんだんと日本人は引き揚げてしまい、ほとんどいなくなった。当然だが、日本語も周りから聞かえてこない。澄子も日本へ引き揚げる潮時だと思い、一九四八年大連港から帰国した。

彼女は大連にいたとき、「開拓民」の弥栄村いよさかむらの人たちが父の実業学校に収容されていたとき、仲間ともに食事作りなどで支援したが、彼女自身は悲惨な体験とは無縁であり、澄子にとって大連、旅順は故郷であり、とりわけ旅順は懐かしく大好きな街なのである。

## 美智子皇后と満洲

その後、澄子は私に「美智子さんに『嗚呼 満蒙開拓団』を見てほしい。大類さん、なんとかなりませんか」と言うのだった。美智子さんとは当時の皇

后である。なんでも澄子が監督した記録映画『歌舞伎役者 仁左衛門』を、美智子はお友だちと共に見に来てくれたことがあったという。そういうご縁があるなら、澄子自身がDVDを贈ればいいのではないか、と言ったが彼女は、「私からはどうも……大類さん、なんとかなりませんか」と言う。

そこである人のことが頭に浮かんだ。仮にKさんとしておこう。Kに話すと、「では私が美智子さんにお送りしましょう」と言う。特別に作ってもらったDVDと美智子宛ての手紙を私は書き、Kに送った。

それから一か月後ほどだったろうか。Kから電話が入った。「大類さん、昨日、天皇后陛下にお会いしました」と言い、美智子は私の手紙を机の前においてKに、「重いテーマの映画を見ました。ありがとう」という言葉をおかけた、という報告を受けた。

そして二週間ほど経ったころだろうか。美智子が「残留され帰国された人たちに私たちが何かできることはないでしょうか」とご下問されたと言うの

だ。そう言われた役人は驚き、「なぜ今、残留婦人なのか」と疑問を持ち、Kに問い合わせた。Kが澄子の映画を見たからだろうと言うと、ご下問を受けた彼はすぐ納得したという。

しかし翌年の二〇一一年三月一日の東日本大震災で、被災者への慰問に追われた美智子たちはそれ故、その希望は後回しにならざるを得なかった。しかし、それは二〇一七年の満蒙開拓平和記念館訪問につながった。

その訪問翌日の全国紙は、扱いは小さかったが現地地の『信濃毎日新聞』は、一面から社会面までほぼ全紙面というほど大きく両陛下の記念館訪問を報道した。案内をした寺沢秀文（現館長）によれば、方正日本人公墓の写真を前に美智子は、「これがあの公墓ですね」と語ったという。美智子は残留婦人への思いを忘れてはいなかったのである。

## 藤沢嵐子にとって満洲とは……

この二月、『タンゴ タンゴ タンゴ』（批評社）というタイトルの本



を上梓した。サブタイトルは、「情感 Sentimiento 織りなす魂のしらべ」である。

日本タンゴ・アカデミーという会があり、そこで出している機関誌や、『ダンスファン』に掲載されたカルロス・ガビートという今は亡きタンゴダンサーヘインタビューした原稿、また『東京新聞』に掲載されたタンゴエッセイなど、タンゴ関連の原稿がそれなりに溜まり、なんとか本にならないかと思った。

前著『エスペラント 分断された世界を繋ぐ Homaralismo』（批評社）を二〇二一年五月に刊行して一段落し

た後、編集者に話したところ、「読んでみましょう」と言ってくれ、本にしようと言ってくれた。

拙著には、一章を割いて藤沢嵐子の「大連体験」に焦点を当て、彼女の内面について書いた文章を収めているが、改めて嵐子の大連体験を思い起こし、山口淑子や羽田澄子の満洲との関わりの違いを思うのである。

タンゴ歌手として年末恒例の紅白歌合戦に五回出演するなど、大衆的にも人気があった藤沢嵐子は、二〇一三年亡くなった。それを追悼する意味を込めて書いた原稿のタイトルは、「嵐子よ、安らかに眠れ《大連体験》を昇華した藤沢嵐子のタンゴに思う」である。

## 「大連のことは口にするのも嫌！」

嵐子の父は、満洲瓦房店がぼうてんにある会社の工場の庶務課に勤めていた。単身赴任である。瓦房店は大連から北東一〇〇kmほどのところにある。当時、嵐子

は上野にある東京音楽学校（現東京藝術大学）に在学していたが、父は家族もみんな瓦房店に移ってこいという。

一九四四年の東京は「ひどい状態だった。戦争が進んで爆撃はひどくなる。私は食べものの欠乏よりも、石鹼とかチリ紙とか日用品のないのがものすごくいやだった。なんだか体がベトベトして気持ち悪くて」と嵐子は書いている（藤沢嵐子著『カンタンドー——タンゴと嵐子と真平と』六興出版、一九八七年）。

父は嵐子に、学校は休学すればいい、満洲でもハルピンに出ればロシア人のいい音楽教師がいる。戦争が終われば、また帰って東京で勉強を続ければいい。せいぜい二年のことだと言う。「戦争に勝つと思っていたのだ！ みんな」と嵐子は書いている。

嵐子はそうして学校を中退して、母と末の弟と共に瓦房店に渡った。東京駅から姫路へ、そして乗り換えて下関へ、そこから船で満洲へ。

瓦房店に着いたのは、一九四五年度の元旦だった。ニラの匂いがただよう街

に、嵐子の母は怒った。嵐子は書いてある。「満州——ニラの匂い。母はすぐ父とけんかをはじめた。『どうして、こんな臭い、不潔なところへ連れてきたの!』」。

戦争は日本の敗北で終わった。瓦房店の工場は接収され、父は失職した。嵐子は大連のダンスホールや音楽喫茶で歌い、父に代わって家族を養ったのだ。

前述の嵐子の著作には、上記のように大連でのことを少しばかり書いているが、しかし現実には、大連のことは周りの親しい人にも語らなかった。

私が日本タンゴ・アカデミーの機関誌二〇一四年春号に書くために取材した当時、嵐子のそばにいたギターリストの河内敏昭や、付き人のように寄り添っていた河内夫人にも決して大連のことは語らなかったという。

今は亡き蟹江丈夫（タンゴ解説者）はかつて私に、嵐子に何度も大連のことを聞こうとしたが、「もう大連のこととは思いついたくもない」と言ってお口を閉ざしたという。蟹江は「それだけ

大連のことは思い出すのも嫌だったんでしようね」と私に語ったことがあった。

### 嵐子との短い会話

一九七一年だったか、私は一度だけ嵐子と短い会話を交わしたことがあった。

六八年の夏から半年ほどのヨーロッパでの滞在中で、ナシヨナリズムなどについて自らの問題として受け止めていた私は嵐子に、「タンゴを歌うということに疑問を持った事はないか」と聞いた。

東ベルリンのベルリーナ・アンサンブルでブレヒトの芝居、西ベルリンでワグナーの楽劇やオペラなどを見るにつけ、日本人が欧州生まれの芝居や歌などを演じたり歌ったりすることに疑問を持つというか、本当のところどこまでヨーロッパ人のレベルまで達するのか大いに疑問を持っていた。しょせん、物まねの域を出ないのでないかと思っていたのである。

嵐子はそのような疑問を持つ私の質問に、「私も何度か悩み、聖書を読んだりしました」と語った。その当時、彼女はまだ洗礼を受けていなかったが、その後、彼女はキリスト教に入信した。

しばしば、「満洲帰りはさっぱりしている」と、満洲育ちの女性を妻にもつ友人が私に語ったことはあるが、嵐子は「未練たらしいことは本当に言わなかった」と前出の河内は私に語った。

後年、歌手を引退し新潟の長岡に引越したが、嵐子はきれいさっぱり、タンゴ関係者とはもとより、今まで付き合い合っていた人とも交際を絶ったという。

満洲と縁がある山口淑子、羽田澄子、藤沢嵐子という傑出した三人の女性と少しばかり縁があった私だが、彼女たちの人生における満洲について思うと、日本生まれ日本育ちの私にどれだけ彼女たちの内面に迫れるのだろうか、と噛みしめるのである。